

## NASA の愉快的仲間たち

(ISAS ニュース 1995 年 1 月号、No.166 号より一部改訂して転載)

元 宇宙科学研究所 中谷一郎

GEOTAIL 衛星を通して、実に多くのアメリカの人たちと付き合うことになりました。NASA の 3 つのセンター、ヘッドクォーター、研究所、大学などの友人を数えてみると、顔を思い出すだけでも 50 人以上になります。打合せで議論をした人を含めるとたぶん 100 人を越えるでしょう。

とくに、NASA のゴダード飛行センターの ISTP オフィスとは格別親しくなりました。ここのシステムマネージャーの Mac Grant 氏に筆者が送った電子メールの数は 1500 本を越えています。彼と連日、技術情報を交換しながら、面白いことに気づきました。

電子メールをうまく使うと彼の地と当地との時差のために、大変能率のよい作業が可能になります。すなわち当方が、朝、オフィスに出てみると、Mac から技術上の厄介な質問が来ているのが普通で、これに対して一日かけて検討して、その結果を帰宅する前にコンピュータ端末にたたき込みます。併せてこちらからの質問も加えてメールにして送ります。ちょうど筆者が帰宅する頃、Mac が彼の地で、出勤し、当方の回答と質問を読むことになる訳です。彼は質問に関して(当方が夜寝ている間に)一日かけて検討し、彼の帰宅前に同じく 回答と質問を当方に送り出します。

かくして、昼夜が逆の地球上の 2 つの地点で 2 シフトの「徹夜の検討」が続くことになります。毎朝、出勤直後に "Dear Ichiro" で始まる Mac のレターを読み、毎晩、帰宅直前に "Dear Mac" で始まるレターを書くのが、すっかり習慣となりました。当方が出張で 2、3 日メールをサボると Macからは、病気ではないかと安否を気遣うレターが来始め、一週間も黙っていると、入院でもしたかと、宇宙研の他の人に問い合わせが来ます。

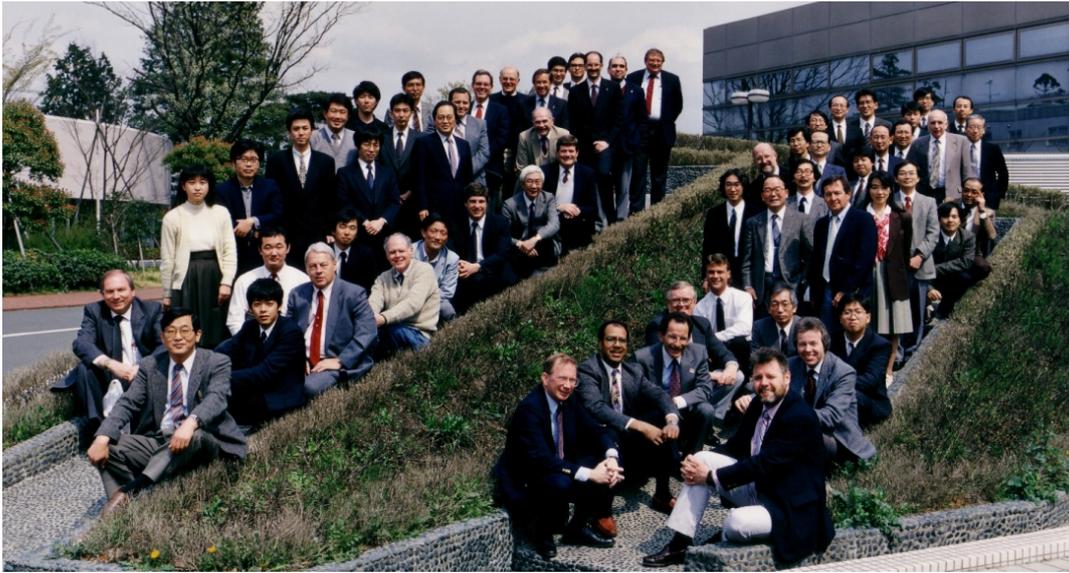
無味乾燥な技術情報の交換の合間には、日常のちょっとした、出来事を知らせたり、冗談を言い合うのが常で、Mac のアメリカ流のセンス溢れるユーモアを大いに楽しみました。

ある年の 4 月 1 日に、私から Mac に宛てたメールで、「当方は、6 ヶ月の休暇をとって、家族と南フランスで暮らすため、明日から連絡がとれなくなるが、悪しからず」という、冗談を送ったことがあります。テキもさるもの、「私も妻と参加するから待っていてほしいとの平然とした返事。

ところが後で聞くと、実は私のメッセージの直後、ISTP のオフィスは、パニックになり、だれかがエイプリルフールに気づくまで、今後のプロジェクトの進め方に関して、かなり深刻な会議をしたということ、これも電子メールの常連 Bob Callens という気のいい男が漏らしてくれました。私は一人で笑い転げた次第。

GEOTAIL 衛星の日米両グループにとっては、日米間で大問題になっていた貿易摩擦とも無関係に楽しい付き合いをすることができ、ささやかな異文化交流を果たせたことは望外の幸せでした。

今にして思うと、日米のメンバがお互いを深く知るにつれてしっかりした相互信頼が形成されたことが、GEOTAIL 成功を支える一つの柱になったような気がします。それで思い出すのは、NASA ケネディー宇宙センターで、3 ヶ月にわたる GEOTAIL 打ち上げ準備作業の面倒をみてくれた Larry Kruse 氏の言葉です。「今まで、国内外のいろいろな衛星打ち上げに付き合ってきたけれど、GEOTAIL のチームがベストだった。」Larry は、「射場支援主任」という肩書で、米国やヨーロッパのいくつかの衛星打ち上げに関与してきたのですが、私たちのチームを高く評価してくれた様子。彼の言葉はお世辞ではなかったと思います。



年に2回に日米交互に開催していた、ISAS-NASA 共同作業部会 (JWG) の集合写真  
(この写真は 1992 年 4 月 14 日、射場輸送前の JWG@相模原)